

67 「なないろの利用に関する意識調査」から見えてきた課題への取り組み ～その後の経過について～

秩父学園 地域支援課 地域療育支援室 川俣ひとみ 杉本拓哉 星美弥子

【はじめに】

各自治体が行う地域子育て支援拠点事業を、当園では発達が気になる未診断・未就園の子どもとその家族を対象をしぼり、平成26年10月にあそびの広場なないろとして開所した。

今年度は、経年実績や平成27年度に実施した「なないろ利用者アンケート」から見えてきた以下4つの課題に対し、昨年度より開始した取り組みの経過を報告する。

【課題とその取り組み】

1) 対象児の範囲の拡大

昨年度より利用対象とした「発達障害はあるが、様々な理由で専門機関や療育につながらず、現状は未受診・未診断のお子さんとその家族」の利用が今年度の利用者内訳で最も多かったことから、この範囲の対象者に向けたサービスが地域に不足している現状を推察することができた。

2) 新たなサービス展開

保護者同士の情報交換の場として昨年度より開催している月1回のサロンは、子育ての不安や悩みを共有し、意見や情報の交換を通し励まし合うという良い関係の定着がみられた。更に今年度は、参加保護者だけでは理解や納得が難しい問題を解決するため、児童発達支援センターの職員や昨年度なないろを利用した保護者OGをサロンに招き、直接、知りたい情報やアドバイスをもらうなど、自分たちのためのサロンという意識を高めている。

3) 継続的支援を強化していくための連携

今年度から実施した出張なないろは、準備段階から地域の相談窓口を市役所の青少年課にしたことで同課が所管する地域の子育て支援機関である児童館館長会に繋がり、地域に向けた活動展開にも地域への課題提起にも有力な糸口を得ることとなった。更に、良好な連携を続けている保健センターとは、出張なないろへの紹介に際し、事前の情報提供の他、初回利用時の保健師同行が得られたことで、詳細な情報交換や支援の方向性・役割の確認等を行うことができた。

4) 利便性の悪さへの対応

当園なないろのアクセスの不便さに対する対応として実施した出張なないろは、身近な地域になないろを利用する機会を広げたに留まらず、適切な機関に繋がっていない対象者が抱える問題や困難を生活の場から拾い上げる機会ともなった。身近な地域で行うメリットと近いが故に進展を妨げる誘因を整理し改善していく必要を感じた。

【まとめ】

新規の取り組みである出張なないろは、対象としたお子さんとその家族が地域に多く顕在し、地域の支援機関が抱える課題となっていたことが明確となり当園の推察との一致を見た。今後このような事業を自治体主体で実施・継続していくためには、実施機関に①関わるべき対象者を見極める力②利用者が抱える困り事の本質を利用者と一緒に整理する力③支援の役割を他機関との連携の中で果たしていくためのコーディネート力等を備えていく必要があると思われる。